
古城の狼

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古城の狼

【Nコード】

N3197F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドイツに旅行で来た主人公。古城に泊めてもらった彼の周りに謎の殺人事件が起こっていく。果たして犯人は。狼人のお話です。ドイツといえば狼でしょう。

第一章

古城の狼

中に入ってみると日本の森とは違う印象を受けた。

「これがドイツの森か」

ふとそう呟いた。ドイツの森は子供の頃に童話でよく読んだ。妖精や魔物、魔女が息を潜めて人の隙を窺っている。童話から感じた印象はそれであった。

見てみると確かにそういった気配がする。何か見られている感じがした。

「狼や熊はもういないと聞いていたが」

学生になりワーグナーやウエーバーの曲を聴くようになった。そしてドイツの森に対する印象は一層固まっていた。

ギークフリートが小人と共に住み籠を倒したのも森であった。狩人マックスが悪魔に魂を売った男に誘われ入った狼谷も深い森の中にあつた。舞台上見た森の記憶が今甦ってきた。

「魔物が今にも出てきそうだな」

不意にそう思った。子供の頃山に一人で入った時の様な感じであつた。

心細く怖い。小さな葉の擦れる音にも怯えてしまう。そうした幼い日の思い出が今戻ってきた。

日が落ちてきた。欧州の夜は日本のそれと比べて長い。そして寒い。僕は予約していた宿に向かつた。

だが宿は満室であつた。何と手違いで僕の予約は忘れられていたのだ。

「その代わりといつては何ですが」

宿の人が紹介してくれたのはその近くにある古城であつた。何でも古い貴族の夫婦が住んでいるそうだ。

かつてはこの辺りを治める伯爵家であつたらしい。

「あそこですよ」

宿の人間の一人に車で案内されてその古城に着いた。見れば平地に一つ立つ石の城であった。

「見事なお城ですね」

僕はその城を見て言った。宿の人はそれを聞いてにこやかに笑った。

「そうですね、この辺りの名物ですからね」

どうやらこの城はこの辺りの人達にとって象徴のようなものらしい。僕は知らないが結構名の知れた城であるようだ。

宿の人は城の門の前に来ると車を停めた。そして城の中へ向かった。

「ちょっと待つて下さいね」

僕は暫く車の中で待つていた。やがてその人は帰って来た。

「行きますよう」

宿の人は車の扉を開けて僕に言った。

僕は宿の人に案内され城の中に入った。

「ようこそ」

そこには一人の老人が立っていた。身なりから察するにこの城の執事らしい。

宿の人は僕とその執事に別れを告げると帰っていった。車の音が遠くに消えていく。

「お話はお聞きしています。それではこちらへ」

僕はその執事に案内され城の中を進んだ。

中を見る。石で造られた頑丈そうな城である。

「随分由緒正しいお城みたいですね」

僕はドイツ語で言った。僕が一人で旅行しているのもドイツ語が話せるからである。これが幸いした。

「ええ。十世紀の頃に建てられたと聞いております」

「十世紀ですか。またそれは凄いです」

十世紀をいえば丁度神聖ローマ帝国が成立した頃だ。この領邦国

家は名実だけは十九世紀まで続いた長い歴史を持った国家であった。だがその内実は何時までも領主達の力が強くまとまりを欠いていた。そして三十年戦争で事実上崩壊し最後にはナポレオンによってその名さえも消されてしまう。教会と双頭の鷹ハプスブルグ家によって綱引きされ続けたモザイク国家であった。

だがそれが残したのも大きかった。ドイツ人にとっては最初の国家であったのだ。

見れば壁に双頭の鷹の紋章がある。どうやらこの家はかつてハプスブルグ派であつたらしい。

鎧や槍、剣等も飾られている。どうやらかなりの価値があるものらしい。

そういったものを見ながら僕は城の奥へ進んでいった。

執事は一言も発しようとしな。だがその足取りが老人のもではないように思えた。

(速いな)

まるで若者のようだった。見れば脚の動きが異様に速い。外見は六十を優に越えているようだが見かけよりも若いのであろうか。それともただの健脚か。

そんなことを考えているうちに城の奥にあるある扉の前に案内された。

「旦那様、お客様をお連れしました」

執事は低い声でそう言い扉をノックした。

「入ってもらえるように言ってくれ」

扉の向こうから声がした。低い男の声であった。

「わかりました」

執事は答えた。そして僕の方へ顔を向けた。

「どうぞ」

執事はそう言つと扉を開けた。

「はい」

僕は答えて扉の中へ向かった。その時執事の顔をチラリ、と見た。

廊下に飾られた燭台に照らされたその顔は異様に白く感じられた。それは肌の色の問題ではなかった。

まるで死人の様な顔であった。生気が無く蝋の様な白であった。

(・・・・・・・・)

僕はその顔を見て一瞬不気味に思った。だがそれは失礼だと思い打ち消した。思えばこの時に既に本能で何かを察していたのである。

第二章

部屋の中も石造りの部屋であった。石の床の上に赤い絨毯が敷かれている。

そして壁には剣や紋章が飾られている。赤地に黒い狼が描かれている。

大きな窓はガラスである。もう日は落ち黄金色の月が見えている。その明かりが窓から入ってきている。だがそれだけで足りる筈はなく部屋の中も廊下と同じく燭台で照らされている。

その奥には椅子があった。木で造られた古い椅子である。それから察するにこの部屋はかつては城主の間であつたらしい。

その前に男はいた。赤い髪を後ろに撫で付け髪と同じ色の濃い髭を生やした背の高い中年の男である。目は黒く肌は白い。その色はあの執事と同じ色であつた。そして着立てのいい絹の服に身を包んでいる。

(この人の肌も……)

失礼だとは思つたが僕は目の前にいるこの男性の顔色に対しても疑念を抱いた。だが灯りのせいだとこの時は思うことにした。

「ようこそ、我が城へ」

その男性は僕へ声をかけてきた。先程入るように言つたあの低い声であつた。

「私がこの屋敷の主です」

彼は微笑んで言つた。だがその微笑みも何処かぎこちないように思つた。

まるで人形のようなだつた。動きもほんの僅かであるがギクシャクしているように思えた。

しかしそれはこの時は不思議には思えなかつた。肌の色のことがまだ頭に残りそこまでは考えが及ばなかつたのだ。

「東洋からのお客人ですな」

彼は僕の顔を見て言った。

「はい。日本から来ました」

僕はドイツ語で正直に答えた。

「ほう、それは珍しい。この辺りに日本の方が来られるとは」

「一人旅をしております。ところが予約をとっていた宿でトラブルがあります」

「それはお聞きしております」

彼は再び微笑んで言った。

「宿の人に紹介されました。雨露をしのげる場所をお貸しして下さるそうで」

僕は畏まって言った。

「雨露などとはとんでもない」

赤髪のこの人は笑ってそう言った。

「我が家ではお客人には特別の部屋を用意しておりますよ」
そう言うつと鈴を鳴らした。

暫くして先程の執事が入って来た。

「どのようなご用件でしょうか」

執事は一礼して主に問うた。

「この方を客人用の部屋へご案内してくれ」

彼はその低い声で言った。

「わかりました」

執事は頭を垂れて答えた。

僕は再び執事に案内され城の中を進んだ。広い城であった。結構距離があるように感じた。

「こちらです」

暫くしてある扉の前に案内された。執事はその扉を開いた。

その中は豪華な造りであった。天幕のベッドに様々な装身具が部屋中に置かれていた。

「暫くしましたらお食事の時間なのでその時にまた御呼び致します」
彼はそう言うつと姿を消した。それはまるで影のようであった。

「早いな」

僕はその執事の動きを見て再びそう思った。振り向いた時には扉は閉まり彼の気配は消え失せていた。

僕は荷物を置きベッドの上に寝転んだ。暗い部屋は窓から差し込める月明かりで照らされていた。

「これだけだと少し暗いな」

僕は起き上がり灯りを探した。見れば部屋の壁に幾つか燭台が置かれている。

そこに火を点けることにした。ライターを取り出しそこに置かれている蠟燭に火を点けようとした。

第三章

その時だった。その蠟燭の匂いが妙なことに気がついた。

「何だ、この蠟燭は」

それは僕が知っている蠟燭の匂いではなかった。何か異様な雰囲気を感じた。

「……………止めておくか」

僕は灯りを点けないことにした。月を見ながら時間を潰すことにした。

やがて扉をノックする音がした。開けてみると執事がいた。

「ご夕食です」

僕は彼に案内され食堂へ向かった。そこには一つの大きなテーブルが置かれていた。

「どうぞそちらへ」

主人は僕を自分の向かい側に座らせた。そして自分も席に着いた。暫くして使用人の一人が入って来た。若い小柄なメイドである。

茶色の髪に緑の瞳の可愛い娘である。だがその肌はやはり異様に白かった。

(……………ここにある蠟燭のせいなのか)

僕はふとそう思った。だがすぐに食事のことに考えを持って行った。

「運がいいですな。今日はとびきりの御馳走ですぞ」

主は僕に微笑んで言った。

「御馳走ですか」

僕は彼に問うた。

「はい。楽しみにして下さい」

「それでは」

僕は素直にそれを楽しみにした。そしてメニューが来るのを待った。

まずはスープが運ばれてきた。鳥の肉と玉葱が入っている。

「これは雉ですね」

その肉を食べた僕は主人に対して言った。

「はい。今日獲れたものです」

彼は微笑んで言った。

ワインは赤だった。銘はよくわからないが少し辛めだ。

(美味しいな)

僕は素直にそう思った。だがやはり違和感があった。

あの時のワインの味は今でも覚えている。辛口ながら口ざわりがよく甘いワインが好きで僕にも心地良く飲めた。

しかし匂いが気になった。芳しい香りであった。だがその中に何かが入っていた。

それは妙に生臭かった。そして鉄に似た匂いであった。

(血………!?)

僕はその匂いに気付いて咄嗟にそう思った。

まずは自分のくちびるを舐めてみた。傷はなかった。

口の中にも傷はない。では何故なのか。

(まさか………)

ワインを見た。紅くルビーの様な色そのガラスの美しいグラスの中にたたえている。それは血の色にも見える。

しかしそれは一瞬だった。ワインは再びその芳しい香りに戻った。前菜とサラダの次にメインディッシュが来た。メインディッシュ

も雉の料理であった。雉を煮て香辛料で味付けしたものだ。

「如何ですか」

主は僕に対して問い掛けた。

「素晴らしいですね」

僕は率直に答えた。残念だが味はよくわからない。そんなに繊細な舌は持っていない。だが一言でそれは言えた。

「それはよかった」

彼はそれを聞いて満足そうに頷いた。

「何しろ狩りにはいつも気を使っていますからな」

「狩りにですか」

「はい、狩りにです」

彼は笑顔で答えた。やはり何処か生気の無い笑顔であった。まるで人形のようなと感じた。

「我が家は代々狩りが好きでしてな。私も若い頃より狩りを嗜んでおります」

「それは」

だが雉を見て少し不思議に思った。これには銃創は無かった。犬と思われる牙の跡はあるというのに。

「私も好きですが妻はもつと好きですね」

この時彼は初めて自分の細君について語った。

「奥方がおられるのですか」

僕は問うた。

「ええ、今日はおりませんが」

彼は答えた。

「明日には帰ってきますよ」

「そうですか」

僕はその言葉に納得し頷いた。

パン、そしてデザートを食べた。デザートはチーズケーキだった。料理と酒を堪能した僕は部屋に戻った。暫くして執事に風呂を勧められそこで旅の汚れを落とし再び部屋に帰った。

「いい城だな、下手なホテルよりサービスがいい」

僕はベッドに横たわりそう呟いた。

「ただ何か変だな」

家の人達やワイン、蝋燭のことを思い出した。

「それにあの雉の肉」

先程の料理のことも思い出した。

第四章

「何故銃創が無かったのだろう。まさか今頃弓矢で狩りをしているとは思えないし」

ベッドから起き上がり窓の外を見ながら考えた。窓の外には月が輝いている。

「そういえばあの犬の歯の跡」

僕は肉にあった歯の跡について考えた。

「犬にしては大きいような。いや、これは考え過ぎか」

僕はそれについての考えを打ち消した。

「犬といっても色々いるな。大型犬かも知れないし」

その時遠くから遠吠えがした。

「狼か!？」

だがこの辺りの狼はもういないと聞いている。

「犬か。この屋敷の犬かな」

僕はふとそう考えた。だがそれは違っていた。

遠吠えは黒の森の方から聞こえて来る。まるで狼のそののように。

「違ってみたいだな。何処の犬かは知らないけれど」

僕は窓から目を離れた。

「どちらにしろ月にはよく合うな。そう思うと音楽みたいでいい」

僕はベッドに入った。窓には黄金色の月が遠吠えを背に輝いていた。

翌朝目覚めると執事が部屋にやって来た。そして僕を食堂に案内した。

「グーテンモーゲン」

食堂に入ると主は僕に挨拶の言葉をかけてきた。僕もそれに返した。

もう一人僕に挨拶の言葉を掛けて来る人がいた。女性の声である。見れば白い絹の服に身を包んだ女性である。年齢は三十前後である。

うか。金色の髪に青い瞳の美しい女性である。

その金髪は長く腰まである。軽く波を描き朝の光を反射し輝いている。瞳は澄んでいてまるで湖の様であった。だがその瞳に僕は僅かばかりの違和感を感じた。

「ようこそ、我が城へ」

その女性は僕に言葉を掛けてくれた。僕もそれに返した。

「いえ、こちらこそ。お邪魔しております」

「こちらが昨日申し上げた妻です」

主は僕に対して言った。

「こちらの方がですか」

「はい」

彼は微笑んで答えた。

「宜しく願いますね」

その貴婦人は僕に対し微笑みで答えた。その顔を見て僕はふとこの城のほかの人達とは違うと感じた。

顔に生気があった。肌は白いがそれは雪の白さであり蠟の白さではなかった。美しい肌であった。

僕はこの人の美しさに暫し見惚れた。それに気付いたのか気付かなかったのか主人が声をかけてきた。

「それでは朝食にしますか」

「あ、はい」

僕はその言葉に我に返った。奥方はうつすらと微笑んだ。

食事はドイツらしくソーセージに黒パンであった。ザワークラフトもある。

僕はザワークラフトが好きである。だからそれを多くもらった。見れば主人も同じであった。

だが奥方は違った。ソーセージばかり食べている。パンもザワークラフトも口にしない。

(ソーセージがお好きなようだな)

僕はその時はそう感じただけであった。そして朝食の後家の主人

と奥方に礼を言つて城を去ることにした。あまり長居をするのは失礼だと思つたからだ。

「待つて下さい、これから予定はありますか？」

奥方が尋ねてきた。

「いえ、特に」

僕は答えた。

「気ままな一人旅ですから。まあ暫くはあの森を見ていたいと思つていますが」

そう言つて黒の森のほうを指差した。

「そうですか」

彼女はそれを聞いて微笑んだ。

「それでしたら暫くこの城を宿とされては如何ですか？」

「しかしそれは……」

僕はその申し出を断ろうとした。やはり凶々しいと思つたからだ。

「いえ、よろしいのです」

彼女は微笑んで答えた。

「お客様がおられたほうが何かと賑やかです。それに」

彼女は言葉を続けた。

「日本からのお客様なんて珍しいですから」

「あつ、ご存知でしたか」

僕は彼女が日本という言葉を口にしたのに反応した。

「ええ。城に帰つて来た時に主人から」

「そうですか、ご主人から」

僕はそう言つと主人の方を見た。彼はニコリと微笑んだ。

「それでしたら」

引き止めてもらえるのを無碍に断るのも失礼だと思つた。

第五章

結局僕はこの城に暫く留まることにした。奥方は僕がそう言うのにこりと微笑んだ。その時歯が見えた。白い象牙の様な歯だったが犬歯が妙に鋭いと思った。

その日僕は昼前に森に向かった。そしてその中に入り森林浴を楽しみ散策した。

「森林浴なんてずっとしていなかったな」

僕はふと思いついた。昨日は森の中を見て回ることでしか考えていなかったのだ。

「こうして久し振りに味わってみるとやっぱりいいな。心が落ち着く」

昨日の不気味な気配も忘れて僕は切り株の上に座り森林浴を楽しんだ。

一時間程楽しむと再び散策を始めた。足下にすみれの花を見つけた。

「お、すみれか」

僕はすみれが好きだ。その色も大きさも気に入っている。

「ここでも見られるなんてな。ドイツのすみれも中々いい」

機嫌をよくした僕は森の奥へ進んだ。すると野ばらを見た。

「野ばらか」

不意に僕はシューベルトの歌を思い出した。そして笑った。

「面白いな。ドイツで野ばらか」

そしてその野ばらに顔を寄せてよく見てみた。見れば美しい赤色である。

「薔薇の色とは少し違うな。これはこれで独特の色だな」

僕はそう思いながらその野ばらを見た。

花びらに触ってみる。水気がある。

その時指に何か着いた。水の様だ。

「？露か？」

違った。それは露ではなかった。それに露はもう消えている時間だ。

見てみた。それは赤い色をしていた。

「蜜・・・・・・・・なんかないな」

そう、それは血であった。

「どういうことだ」

不意に恐ろしさが全身を襲った。得体の知れぬ何かを感じた。

何故この野ばらに血が着いているのか。僕は不意にそう考えた。

「先にここに来た人が棘で指を傷付けたのか・・・・・・・・？」

違った。棘はどれも綺麗なままであった。それに若いだろう。

棘はどれもまだ柔らかい。

「だとすれば・・・・・・・・」

辺りを見回した。しかし何処にも傷を付けたと思われるものはない。

その時だった。何か僕の前で落ちて来た。

「雨・・・・・・・・！？」

頬に落ちたそれを左の指で拭いた。それは雨ではなかった。

それも血であった。紅い血であった。

「どういうことだ・・・・・・・・！？」

思わず上を見上げた。そこには大きな木の枝がある筈だ。

木の枝はあった。緑の葉も生い茂っている。

だがそこにあるのは緑の葉だけではなかった。別のものもあった。

「な・・・・・・・・」

僕はそれを見て絶句した。そこには人がいたのだ。美しい若い女の人だ。

その女の人は生きてはいなかった。生気の無い眼で僕を見ていた。その喉から血を流しながら。

「そうですか、貴方が見た時には既に木の上に」

携帯で呼んだ警官の一人が僕に事情を聞いてきた。死体は今日の

前で運ばれて行っている。

「はい、喉から血を流しながら」

僕は答えた。ありのままを言った。

「喉ですか。それで一つ妙なことがあるんですがね」

警官は考える顔をして言った。

「貴方は動物の事にお詳しいですか？」

彼は僕に尋ねる目で聞いてきた。

「？はい。大学は生物学を専攻しておりますので」

「それでは。実は私は獣医学を専攻していたのですが」

そう言つと担架で運ばれようとする死体の前に来た。

「これを見て下さい」

そう言つて担架に架けられている毛布を取った。

「あ………」

その死体を見て僕は絶句した。あまりにも無残な死体であつたらだ。

所々食われ右手と左足は無かつた。食い千切られているようだ。

喉から血を流していると思つたが違つていた。その喉は喰われ千

切れかかっている。そして片目も無い。

「………これを見てどう思われますか」

彼は僕に尋ねてきた。

「………そうですね」

僕はその無残な死体を見ながら言った。

「この歯形は狼か何かしらの大型のイヌ科の動物のものと思われませんが」

「ですね。私もそう思います」

彼は表情を曇らせたまま答えた。

「狼ではないでしょうか。これ程の大きさの歯から察しますと」

「やはりそう思われますか」

「はい。この辺りは狼も多かったと聞きますし」

僕はそう言いながらも違つ、と思つた。

何故なら狼は人は殆ど襲わない。まして食べ物など村に行けば多量にあるというのに。村はすぐそこだ。

そして何よりもわざわざ木の上に登って食べるなどとは。虎や豹ならいざ知らず狼は木には登らない。

「ただ一つ気になることがあります」

彼は死体の干切れかかった首を指差して言った。

「狼は確かに相手の喉笛を狙います。しかしそれはあくまで相手の息の根を止める為なのです」

「そういえば犬もそうですね」

僕は軍用犬等を思い出しながら答えた。

「はい。狼はその後は食事にかかります」

「というと首は切らないんですね」

「そうです。それは狼の習性の一つです」

「ということとは……」

僕はその警官の顔を見ながら尋ねた。

「はい。これは狼の仕業ではないと思います」

彼は暗い顔で答えた。

第六章

この辺りには狼はもういないそうだ。既に狩り尽くされているらしい。これはこの辺りだけでなく欧州全土で言えるらしい。

欧州は昔から牧畜を行なってきた。彼等にとって家畜を狙う狼は恐るべき脅威であったのだ。

その為人々は狼を怖れ憎くんだ。狼はことあることに悪魔とみなされ退治されていった。これは長きに渡った。

そして気が着いた頃には狼は殆どいなくなっていた。狼王クルト―はもう遙か昔の物語である。

ジエヴォダンの野獣ももういない。あの野獣も狼ではないのではないか、という説も多い。

「そういえば」

捜査が終わり警官達が去り森を離れ田園を歩きながら僕は考えていた。あの野獣についてである。

あの野獣が狼ではない、という人がいる根拠の一つが狼は首を切らない、というものであった。先程警官に言われ今考えるまで不覚にも気が付かなかった。

そしてあの死体にはもう一つ気になることがあった。

「うつ伏せだったのはどういうことだ」

木の上にいるというだけではない。普通狼や犬に襲われた場合喉を狙われるから死体は仰向けになる。ところがあの死体はうつ伏せであったのだ。

「考えてみれば妙だ」

僕はそのことについても考えた。おそらく警察も同じであろう。

そう考えながら田園を歩いていた。ドイツによくある牧歌的な風景である。

「同じ田園といっても我が国のとは雰囲気が違うな」

麦畑を見ながらそう思った。ジャガイモ畑もある。ドイツ人の主

食は何と言つても麦とイモである。

「何処かに食べるところはないかな」

ジャガイモ畑を見ていると急にお腹が空いてきた。時計を見ようとした。だがない。どうも何処かで落としてしまったらしい。

「参ったな」

よりによつて時計を。財布と時計と携帯電話だけは落としたら困るものだ。

その時鐘の音がした。見れば近くの教会からである。

「綺麗な教会だな」

僕は人目見てそう思った。その音を聞いて村の人達は作業を止めて自分の家へ帰って行く。

「昼御飯を食べに行くのか。僕も何か食べないと」

とりあえず店を探した。しかしそんなものは何処にも無い。

「……もう少し歩かなくてはいけないかな」

僕は少し落胆してそう思った。教会の前を通り過ぎた。

「もし」

そこで教会の方から声がした。

「はい」

僕は日本語を口にして振り向いた。するとそこには黒い服を着た神父さんが立っていた。

「旅の方ですか？見たところ東洋の方のようですが」

白髪の痩せた身体をした初老の男性である。顔付きは穏やかで落ち着いた物腰である。

「はい、そうですか」

僕はドイツ語で答えた。

「そうですか」

彼はその言葉を聞いて微笑んだ。やはり穏やかな微笑である。

「どうやらお腹を空かせていらっしやるようですが」

「いえ、そんなことは」

僕はそれを否定しようとした。だがその時腹が鳴った。

「そのようですね」

彼は微笑んで言った。

「神の御前では隠し事は出来ません。そして困っている者を救うのは神に仕える者の勤めです」

「はあ」

僕はそれを黙って聞いていた。

実は僕はキリスト教徒ではない。特に偏見はないつもりだがあまり親しんでいるわけではない。だから教会に入るのは少しはばかれるのだ。

「こちらへ。丁度私も食事しようと考えていたところです」

僕は教会へ招かれた。

「どうぞ。大したものはありませんが」

ジャガイモとパン、そしてソーセージであった。

「如何ですか」

神父はテーブルの向かい側に座り僕に尋ねてきた。

「いえ、美味しいですよ」

それは本当であった。特にバターを塗ったジャガイモは最高であった。

どうも日本のジャガイモと違うようだ。これはドイツに最初に来た時から思っていたことだがこの国のジャガイモは我が国のジャガイモとは何かが違う。

どう調理されるかという前提が大きく関わってくるのだろうか。

我が国のジャガイモはカレーに入れたり肉じゃがにしたりして食べることが多い。これに対してドイツのジャガイモはマッシュポテトにしたりパイにしたりする。勿論こうして茹でてバターを塗って食べることも多い。

ソーセージはやはり本場だろうか。こちらの方が美味しいと思う。作り方の歴史的な年季もあるのだろうか。

パンは黒パンである。教会だから質素にしたのだろうか日本にいる時は白パンばかりなのでこれは珍しかった。

「本当に気に入ってもらえたようですね」

神父は僕が食べる姿を見て微笑みながら言った。

「我が国は食べ物は今一つだとよく言われますのでこれ程美味しそ
うに食べて頂けるとは思いませんでした」

「いえいえ、とんでもない。日本でもこんな美味しいソーセージは
食べられませんよ」

僕はソーセージを頬張りつつ答えた。

第七章

「おや、日本から来られたのですか」

「はい、一人旅で」

「ううむ、珍しい方ですな。遠い東の国からわざわざこんなところまで一人で来られるとは」

「まあドイツ語も話せますし。それに旅は一人の方が何かと気楽ですしね」

「そうですね。それでここには何が目的で来られましたか？」

神父は少し探る目で尋ねてきた。

「森を見に来ました」

僕は素直に答えた。

「森、ですか」

それを聞いた神父の顔色が暗くなった。

「もしかして今日の午前にも」

何を聞きたいか僕にもわかった。

「はい、見ましたよ。残念ながらこの目で」

僕は答えた。

「そうですね……」

彼は視線を落として呟いた。どうやらこの話はもうこの小さな村にも聞き及んでいるようだ。

「実は僕は生物学を学んでいたのですが」

僕は神父に対して言った。

「あれは狼がやったとはとても思えないのですが」

「そうですね。それでは何だと思われませんか？」

神父は顔を上げて僕に尋ねてきた。

「それは……」

急に突っ込まれたように感じ僕は口籠もった。

「狼男だと思っはいませんか」

神父は探る様な目で僕に尋ねてきた。

「うつ……」

僕は言葉を詰まらせた。その通りであった。こうした話は信じるほうなのだ。

「やはり」

神父はそれを聞いて静かに頷いた。

「私もそう考えています」

神父は瞑目して言った。

「ご存知かも知れませんが我が国は昔からこうした話が多いのです。森と城に囲まれた国でありますから」

「はあ」

僕は頷いた。ドイツ語を学ぶうえでこの国の歴史や文化についてもある程度は学んできた。そしてこの国の話には幽霊やそうした魔物の話が多いことに気付いた。

「死霊や妖精、魔女……。古来より森には多くの異形の者が潜んでいると言われてきました」

「それは僕も。我が国でも童話等でよく読みましたし」

「意外ですね。我が国の事が童話で伝わっているとは」

神父は僕の言葉に対し意外といった顔をした。

「日本人は色々細かい人達だとは聞いていましたがそんな事までご存知だとは。しかしこれでお話をしやすくなりました」

「はあ」

僕は相槌を打った。こうした態度は外国ではよく怒られるらしいが日本人独特の話の聞き方だと思うのでここでも使った。

「狼男はご存知ですね」

「童話や映画に出ている程度なら」

「それだけで充分です」

神父は微笑んで言った。まるで年老いた教師が若い生徒に接するような笑みである。

「ただ一つ付け加えることがあります」

「それは何ですか？」

僕はあえて尋ねた。

「狼男は彼等の一部の名に過ぎないのです」

「といたしますと？」

僕は話を突っ込んでみた。

「本来は人狼というのです。狼の力を備えるのは何も男だけではありません」

「そうなのですか」

知っていたがそれを聞きたかったのだ。もしかしたらここから僕の知らない話が聞けるかも知れないと思ったからである。いささか意地が悪いと自分でも思うが。

「女も変身出来るのです。しかも」

「しかも!？」

僕はまた尋ねた。

「その力は男のそれよりも大きいと言われております」

「.....」

それを聞いて僕は絶句した。それは知らなかったからだ。

「男の人狼は力が強いのですが女のそれは魔力が強いです。これは魔女が人狼になることの影響だとも言われておりますが」

魔女の中には変化の術を身に着けている者も多かったという。そして異形の者と交わり恐るべきものを産むことがあったという。

「特に目にその力を持っていると言われているとおりです。その目を見た者を意のままに操ったり睨んだ屍を自身の操り人形にしてしまったり」

「かなり強大な魔力の持ち主のようですね」

「はい。その為古は教会もかなり苦しめられた聞いております」

かつて教会は魔女狩りと称して多くの無実の人々を虐殺していた。これは教会の権力欲、台頭してきた新教に対する焦りや自らの勢力の衰えに対する焦り、物欲、そして無知と偏見によるものであった。だがそのおぞましい宴の陰で闇の者達と戦う者達もいたという。

神父は語った。

「多くの犠牲が出ました。そして教会はようやくあの闇の者達を人の世から追い出すことに成功したのです」

「多くの犠牲ですか」

「はい。それでも彼等は森の中に潜み続けました」

彼は森の方を見て言った。

「シューベルトやワーグナー、ウェーバーの音楽をお聞きになられたことはあると思いますが」

「はい」

僕は彼等の音楽は好きである。学生の頃からよく聞いている。

第八章

「聞かれていると森をイメージすることが多いとおもいます。これは我々の心の無意識に森があるからです」

先程も出たようにドイツは森の国である。彼等の心の奥底に森があるのは当然なのだ。

「その中に潜んでいたのです。その恐怖はいかばかりでしょうか」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

我々にとって鬼と同じであろうか。鬼も我々の無意識にある山に隠れ住み人々に害をなしてきた。その為だろうか。僕は子供の頃山が怖かったのだ。

「そして我々は森に入りました。そしてその異形の者を倒していったのです」

「それでもまだ残っていると」
「はい、おそらくは」

彼はそう言うのと表情を暗くさせた。

「実はこうした事件は以前より度々起こっているのです」
彼は沈痛な声で言った。

「森の中で異形の者の餌食にされたという事件が。私はそれを聞きこの村に派遣されたのです」

どうやら彼はただの神父ではないらしい。

「そうだったのですか。そして何か手懸かりは？」

「何も・・・・・・・・」

彼は残念そうに首を横に振った。

「森の中に潜んでいると思われるがはっきりしたことは・・・・・・・・
。上手く潜んでいると思われるます」

「そうですね・・・・・・・・。それにしても」

僕はある疑念を神父に対して言った。

「僕のような通りすがりの男に言っても構わないのですか？その様

な重要なことを」

「それは構いません」

彼は穏やかに微笑んで言った。

「貴方がここに来られることは運命なのですから」

「運命？プロテスタントでいう予定説ですか？」

「はい」

彼は答えた。

「私はここへ来る時協力者が現われると聞いていたのです。それは今日現われると」

「それが僕だったと」

「そうです。私は貴方がここへ来るのを待っていたのです」

「それは……」

これには正直驚いた。まさかこんなことになるとは夢にも思わなかった。

「これも神のご意志でしょう」

神父はそう言うと微笑んだ。

「そうだとしたら何故僕が!？」

これが第一の疑問だった。

「貴方の身に着けている知識を神は望まれたのでしよう」

「僕の知識ですか？そんな大したもの……」

僕はその言葉を聞いて恥ずかしくなり苦笑した。

「精々動物に関するものしか」

「それを望まれたのでしよう」

彼はにこやかに笑って言った。

「それが如何なる力になるかは私にはわかりません。ですがそれが必ずや役に立つでしょう」

「そうだったらいいですけどね。ということは僕も人狼の退治に参加すると!？」

この時ようやく気付いた。よく考えたらそうなのだ。だからここにいるのだ。

「そうです。それも運命です」

神父は相変わらずにこやかに笑っている。

「生憎僕は化け物のお相手は……」

「それは私がします。これでも法皇様より直々に任じられた退魔師なのですから」

「そうなのですか」

どうやら神父というのは仮の姿らしい。それにしても退魔師とは噂には聞いていたがまさかこの目で見るとは。

「貴方は狼についての知識を私にお教え下さい。出来れば思い当たることも知らせて頂ければいいですが」

「それだけですか？」

僕はその要請が存外にささやかなものであったのでいささか驚いた。

「はい。魔物を倒すのは私の務めですから」

真面目な宗教関係者の共通点だろうか。自分が進んで仕事をしたがる。その為に周りが見えなくなることも度々だがそれはご愛敬というものであるうか。僕はこうした人が結構好きである。

「それでしたら喜んで」

僕は笑顔で彼に対し言った。

「有り難うございます」

神父はやはり微笑みでもって返してきた。僕はその言葉を彼と同じく微笑みで受け取った。

僕はとりあえず教会を後にした。そして森に戻った。

「ただの旅じゃなくなっちゃったな」

僕は森に入り苦笑した。まさか魔物退治に協力する破目になるとは。

「けれどこれが運命なら仕方が無いか」

そう言って森の中を進んだ。これは先祖代々からのだろうか。

どうも僕は何でも楽天的に考えてしまう。親父やお袋も

そうだ。一家全員が楽天的である。

本来なら化け物を相手に戦うのである。命の危険がある。逃げ出してもおかしくはない。

しかし余裕をもって神父に協力している。死ねばそれまでだとも思っていた。

先程死体があつた場所に行くと警官達がまだいた。残って捜査を続けているようだ。

第九章

「おや、どうしました？」

先程の獣医さんが声をかけてきた。

「いえ、ちよつと落とし物が無いかと思ひまして」

僕はあえて臭い嘘をついた。ありたきりだが実は実際に腕時計を落としている。

「これですか？」

獣医は腕時計を差し出した。僕のものであった。

「あ、これです」

これで嘘をついていないことになった。偶然というか幸運であつたが。

「ところで一つ気になることがあるのですが」

獣医は表情を暗くして言った。

「何ですか？」

僕はその様子に只ならぬものを感じていた。

「時計に毛が付いていたのですが」

「毛!？」

何か得体の知れぬ不吉なものを感じた。

「これです」

獣医はそう言うつと僕にあるものを見せた。

それはビニールの袋に入れられた金色の毛であつた。

短い。五、六センチ程であろうか。それは見たところ犬の毛に似ていた。

「死体にも同じ毛が付いていました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「近くの木の下に落ちていたのですが。どう思われますか」
獣医はそう言うつと言葉を改めた。

「あつ、別に貴方を疑っているわけではありませんよ」

そう取られることを懸念したようだ。

「これはどう考えても人が起こした事件ではありませんし。ただこの時計が見つかったのはついさっきのことです」

「さっき、ですか」

「はい。何かが動いたと思ったら」

「何か、ですか」

僕はそれを聞いてピン、とした。

素人の僕ですらそうだったのである。警官である彼等は既に確信していた。

「どうやら木の上に隠れていたようですね。そして立ち去ろうとしたその時に持っていたこの時計を落としてしまった」

「そうなのですか」

「この時計は何処で落とされました？」

「何処ですか!？」

その質問に僕は考え込んだ。

言われてみると何処で落としたのだろう。よくわからない。気付いたのは村に入ってからであった。

「ええと……」

とんと見当がつかない。まずは起きてからの時を思い出してみる。朝起きて腕に時計を着けたか。記憶にない。

(あの時か!?)

どうもそんな気がする。だがこれはありえない。

何故城にある筈の時計が今ここに。それだけでも充分不可思議だ。

「思い出されましたか!？」

獣医は尋ねてきた。

「その……」

僕は口籠もった。確証は無いしもあひあったとしてもこんな話誰も信じてはくれないだろう。

「どうもこの森みたいですね」

僕は嘘をついた。そういうしかなかった。それに幾ら何でもあり

えないからだ。

「そうですか。では容疑者は貴方が落としたこの時計を拾ったようですね」

「はあ」

「そして現場から逃走する際に落とした。そう考えられます」
「そうですか」

僕は警察の捜査というものはよくわからない。正直そうですか、とかはあ、とか答えるしかない。幾ら何でもドラマとは違うということ位わかる。

「申し訳ないですがこの時計は暫くお預かりします」

「やはり」

これは予想していた。

「犯人捜査の重要な手懸かりですので。検査が済み次第すぐにお返しします」

「どうも」

「その間どうされます？よろしければ腕時計をお貸ししますが」

「いえいえ、いいです」

流石にそれは図々しい。僕は断った。

「これがありますから」

そう言って携帯電話を取り出した。そこにはタイマー機能もある。携帯電話ですか。それなら問題ありませんね」

獣医はそれを見て微笑んだ。

「ええ。日本製ですよ」

「おや、奇遇だ。私のものですよ」

彼はそう言って自身の携帯を取り出した。

「今までは我が国のものを使っていたのですが評判がいいので。噂通りの性能ですね」

「そうですね。僕も好きですよ。色々細かい機能もついていますし」

「人によってはそれが煩わしいと言いますけれどね」

「まあそれは人それぞれです」

携帯の話をして別れた。森を出た時は夕刻近くになっていた。夜の森は危険だ。人狼がいるならば尚更だ。僕は城に戻った。

「お帰りなさいませ」

執事が出迎えた。そして僕を夕食に誘う。

「わかりました」

僕は一旦部屋に戻り荷物を置きシャワーを浴びた後食堂に案内された。昨日と同じく主人が待っていた。

「グーテナハト」

主人は微笑んで挨拶をしてくれた。僕はその微笑みを見てふと思っ

た。

(やはりあの神父とは違うな)

当然といえば当然であるがそれ以前に何か異質なものを感じる。

何だろう、僕は考えた。やはり何処か生気が感じられないのだ。人はその身体にそれぞれの気というものを持っている。生きていくという息吹である。

それが全く感じられないのだ。まるで人形のようにである。

それはこの主人だけではない。執事や他の使用人達でもある。まるで城全体が作り物のように感じられた。

僕はようやくそれに気付いた。気付くとあまりにも不気味であった。

「どうかなされましたか？」

主人はその無機質な声で僕に問うてきた。

「いえ、何も」

僕はそれを打ち消す様に答えた。そしてテーブルに着いた。

今日は羊料理だった。だが羊の匂いはあまりしない。

第十章

「ラムですか」

僕は一口食べて言った。

「はい。良い肉が入りましてね」

主人は顔をほころばせて言った。やはり何処か無機質である。

「日本ではあまり食べられないと聞いていますがどうですか？」

「僕は結構好きですけどね」

僕は答えた。

「我が国は肉を食べるようになってまだ日が浅いので。残念ながら羊にはあまりなじみが無いのですよ」

実際ヨーロッパに行つて羊がポピュラーなのに少し驚いたものだ。オーストラリアではもっと一般的だった。

「そうなのですか。まあちゃんとした料理を知れば広まると思ひますけれどね」

「そうですね。我々は幸い食事に関するタブーはあまりありませんので」

「ならば問題ありませんな。いずれ広まりますよ」

「だといいいのですが」

どうも匂いが苦手という人が多い。僕はこの匂いが逆にたまらないのだが。これは人それぞれといったところか。

ここで僕はあることに気付いた。

「奥様はおられないのですか？」

そういえば昨夜もいなかった。

「ええ。夜はいつも早いのです」

主人は答えた。

「早いといつてもまだ夜になって少ししか経っていませんが」

「まあそれが妻の生活ですので」

「そうですね」

僕はそれ以上聞こうとはしなかった。他人の、しかも女性の生活に立ち入るのも無作法だからだ。

僕は部屋に戻った。そして服を着替えベッドに潜り込んだ。ふと窓を見る。そこには昨夜と同じ黄金色の月があった。

「相変わらず明るいい月だな」

僕はその月を見て呟いた。

しかも大きい。それは窓から部屋を照らしている。

僕はベッドから出てその月を見た。漆黒の空をその光で黄金色にしている。

「そういえば月は人狼と関係があったな」

僕は昼の神父の話を思い出した。

「不思議な話だ。僕があそこへ行ったのが運命だったなんてな」
有り得ない話だ。そもそも人狼自体が有り得ないのだが。

「まあ明日も行ってみるか」

思い返すと担がれている気もする。明日もう一度よく話してみようと考えた。からかわれているのならもう相手にはしなただけだ。

そう結論を出すとベッドに戻った。そして眠りに落ちた。

その夜不思議な夢を見た。何者かに追われている夢だ。

そこは森だった。昼に入った森だ。僕はそこで何者かに追われていたのだ。

後ろを振り返る。だがそこには誰もいない。しかし誰かが追って来ているのだ。

逃げる。森を出ても逃げた。そして今泊めてもらっているこの城に逃げ込んだ。

城門を閉める。そして城の中を進んでいく。城の中には誰もいない。

城主の部屋に来た。だがそこにも誰もいない。

その時後ろの扉が開いた。そして僕を追って来ている何者かが入って来た。

それは巨大な狼であった。金色の毛に全身が包まれ青い目をした

狼だ。

僕はその目を何処かで見た気がした。そしてその目を見た時動きが止まった。

動けない。まるで金縛りにあったように。そして狼はその間にこちらにゆっくりと歩み寄る。

狼が跳んだ。僕に襲い掛かって来る。

そこで僕の目が覚めた。不意にベッドから起き出す。

「……夢か」

やけに生々しい夢だった。見れば全身から汗が噴き出している。

「そんなに暑くないってのに」

むしろ寒い位だ。ヨーロッパは日本に比べかなり寒い。

僕は窓を見た。そこには相変わらず月が輝いている。

「それにしても狼なんてな」

僕は一言そう呟いて苦笑した。

「話を聞いてすぐに夢に出て来るなんて」

窓の方に歩いた。

「幾ら何でも気にし過ぎだな」

暫くしてまた落ち着いてきた。僕はベッドに戻った。

そして再び眠りに入った。そして朝まで眠りに入った。

第十一章

翌朝目が覚めると暫くして執事が呼びに来た。食堂に案内される。見れば奥方はいる。どうも朝も早いようだ。

「お早うございます」

僕は彼女に挨拶をした。彼女は微笑んで挨拶を返してくれた。

僕は食事を終えた。すると奥方が話しかけてきた。

「今日はどうなさるのですか？」

「また森に行こうと思っと思っていますが」

僕は答えた。

「そうですね」

その時奥方の目の色が一瞬変わったように見えた。

「!？」

それはほんの一瞬だった。しかし確かに変わった。

それはまるで獣の目であった。血に餓えた獣の目であった。

「それではお気をつけて。あの森は色々と噂がありますから」

「はい」

どうやら昨日の事件のことを言っているようだ。僕はそれを聞いた後城を出た。

僕は森には向かわなかった。昨日の神父のいる教会に向かった。

「これはようこそ」

神父は僕を笑顔で出迎えた。

「必ず来られると思っていました」

彼はそう言つと僕を自分の部屋に案内した。

「ところで」

僕は自分の疑念について言おうとした。

「何を仰るおつもりかはわかっていますよ」

彼は微笑んで言った。

「私が貴方をからかっているとお考えですね」

「はい」

これには内心驚いた。まさか読んでいるとは。

「まあそうお考えになるのも当然ですが」

向こうもそう考えているか。しかし神父が人をからかうというのも不自然だ。怪しげな新興宗教の教祖ではあるまいし。この教会はどうやらカトリックらしい。仮にもあのローマ「カトリックの神父が人をからかって何か利益があるとも思えない。まさか詐欺を企んでいるわけでもあるまいし。」

「ご安心下さい。私は貴方を騙すつもりはありません」

「そうなのですか」

とりあえず騙されているわけではないようだ。だがまだ疑念がある。

この神父が正気でないかも知れない。だがそれも違うようだ。

見たところこの神父は至って普通の人である。退魔師が普通かと言われれば困るが人としては常識がある人物のようだ。少なくとも神父としてはごく普通の人である。

「昨日のお話の続きですが」

僕の自分への疑念が消え去ったのを感じ取ったのだろう。神父は語りはじめた。

「貴方はどうやらその人狼の側にいたようですね」

「……………そのようですね」

昨日の事件を思い出した。僕がああ遺体を発見した時おそらくその人狼（本当にいるならばだが）は僕のすぐ近くにまだいたのだろう。

「もしかして森でのことだけと考えていませんか？」

「違うのですか!？」

僕はその言葉に驚いた。

「はい。貴方の身体からは妙な妖気を感じます」

神父は静かに言った。

「それも何処かで纏わり付いたかの様な」

「……………」

だとすれば何処か。残念ながら僕には検討がつかない。

「失礼ですが今何処におられます？」

「お城の方で泊めてもらっています」

残念ながら城の名前までは知らなかった。

「ほう、あの城ですか」

神父は僕の話聞いてピンときたようだ。どうやらこの辺りなら誰でも知っている城というのは事実のようだ。

「あの城にはかつてこの辺りの領主だった方々が住んでおられますね」

「ええ、そう聞いていますが」

僕は答えた。

「あの城ですか……………」

彼は言葉を繰り返して考える顔をした。

「何かおかしなことはありませんでしたか？」

「おかしなことです」

僕はその問いを聞いて考えた。

「そういえば……………」

家の主人や執事、メイドのことを言った。

「成程」

神父はそれを聞いて頷いた。

「そしてあの城の奥方ですが」

僕は彼女のことについても語った。だが彼女は別に妙だとは思わなかった。

「そうですか」

彼は話を聞き終えると頷いた。

第十二章

「その奥方は夜早くに休まれるのですか」

「はい。僕が夕食に来る時にはもう」

「ふむ」

彼は考える顔をした。

「夜の間城の中を少し気をつけて見ると何か見えるかもしれませんね」

「といたしますと?」

「具体的に言いますと起きて城の中を調べて下さい。ただし城の方に見つからないように」

「わかりました」

僕はそこまで話をすると神父と別れた。そして森へと向かった。

「待てよ」

昨日事件があったばかりである。今日行っても警官達がいて森の中を見て楽しむことは出来ないだろう。

引き返した。そして手頃な店で食事と酒を楽しむことにした。

店はすぐに見つかった。ドイツの家庭料理の店だ。質素だが美味しい料理と黒ビールを堪能した。ビールも我が国のものより美味しい。やはり長年ビールに親しんでいる人達だけはある。残念なことに日本酒が飲めない僕はワインやビールを飲むがやはり自分の国のビールを鼻屑にしたい。それでもこの黒ビールは最高だった。

「長居してしまったな」

僕は上機嫌で店を後にした。もう夕方になっていた。

城に帰った。だが誰もいない。門のところにある鈴を鳴らしてみた。

暫くして執事がやって来た。彼は僕の顔を見て少し驚いたようだ。「貴方でしたか」

普段の生気の無い様子とは違う。表情に変化があった。

「はい」

僕はその様子にいささか面食らった。妙な感じがした。

「森に行かれたのではなかったのですか？」

「いえ、そのつもりでしたが」

僕はそこで自分の息がビール臭いの気が付いた。

「まあこういうわけで。飲んでいました」

「そうですか」

彼は納得したようである。

「それではお風呂を用意しておきますので。暫くしたらお呼びします」

「これはどうも。いつもすいません」

「いえいえ、大切なお客様ですから」

彼は先程見せた戸惑いを消し僕を部屋に案内した。僕は風呂に入った後食事に呼ばれた。それにしてもこの国は酒に関して是我が国程五月蠅くはないようだ。フランスと同じく子供も酒を飲んでいる。水が悪いせいであろうが最初見た時にはかなり驚いた。あの総統は酒を飲まなかったそうだがこれはかなり珍しかったのだろう。

「で、森には行かれなかったと」

夕食の時主人も僕に森に行かなかったとことを聞いてきた。ここまできるとわずらわしくなってくる。

しかしそれは顔には出さなかった。やはり失礼だからだ。

「ええ。気が変わりました」

僕はフォークで猪の肉を切りナイフでそれを口に入れながら答え
た。

「そうだったのですか」

主人は残念そうに言った。何故彼が残念そうに言うのか理解出来
なかった。

(別に僕が森に行こうが行かなかるうが関係ないだろうに)

心の中でそう思った。しかしそれは言わなかった。

夕食を終え僕は部屋に帰った。そして時間が過ぎるのを待った。

真夜中になった。こつそりと部屋を出る。

もう皆寝静まったようだ。家の中は静まり返っている。

「よし」

僕は城の中を見回ることにした。ここに来て三日経つ。ある程度は覚えている。

部屋の一つ一つに耳をそばだててみる。執事達の部屋からは物音はしない。寝ているようだ。

主人の部屋に行く。やはり寝ているようだ。

「覗いてみるか」

ふとそう思った。だがそれは危険だと思った。今は止めることにした。とりあえず妙な物音もしないので怪しいことはないのだろうと思った。

「後は」

奥方の間だがやはり女性の部屋を覗くのは悪い。耳をそばだてるだけにした。

「おや」

物音が一切しない。静かなのではなかった。寝息一つ聞こえないのだ。そして気配も無いのだ。

「おられないのか」

そんな筈はないのだがそんな気がした。僕はそれを不気味に感じた。

「おかしいな」

再び覗いてみようと思ったが止めた。やはりそれは良くない。

部屋を後にした。そして自分の部屋に戻った。

「おかしいな、気配が全然感じられなかったぞ」

それに寝息すら聞こえなかった。いくら何でも不自然だと思った。単に壁や扉が厚いのか奥方の寝息の音が小さいのか。しかし気配までしないとはあり得ない。

「一体どうしたことだ」

僕は暫く考えた。だが結論は出ない。

第十三章

そうこうしているうちに目が冴えてしまった。どうにも眠れないので起きて月の灯りを頼りに本を読んでいた。

「明日はしんどいだろうな」

そう思いながらも本を読んでいく。こちらで買った娯楽小説だ。ファンタジーものである。

「そういえばこちらじゃファンタジーは我が国でいう時代劇みたいなものなのかな」

僕はふとそう思った。しかしよく考えてみると東映等がよくやる我が国の時代劇は江戸時代が舞台だ。それに対してドイツやイギリスのファンタジーは大体中世を舞台にしている。時代が異なる。

「そうして類型化して考えるのはよくないな」

僕は思い直した。そして本をそのまま読んで楽しむことにした。

「こうして読むほうが面白いな」

僕はあらためてそう思った。読んでいるうちに夜が更けてきた。携帯の時計を見る。もう四時半になっている。

「少しでも寝ておくかな」

明日も色々歩き回る。やはり少しでも寝ておいたほうがいい。だがその時正門の方から音がした。

「？」

部屋から出ず耳だけそちらに注意を向けた。誰か来たようだ。

「こんな時間にか!？」

幾ら何でも異常だ。こんな時間に来るなんて有り得ない。

しかしどうも違うようである。来たのではないようだ。

「お帰りなさいませ」

あの執事の声がした。朝が早いとは思っていたがもう起きています。と。

それにしても妙だと思った。お帰りなさいませ、とはどういう意

味か。

彼がそのような挨拶をするとすれば二人しかいない。この城の主人か奥方だ。しかし二人共この城にいる筈である。

「あの日本人は！？」

奥方の声がした。どうも帰って来たのは奥方らしい。

「ではやはり部屋にはいなかったのか」

僕は何故部屋から気配がしなかったかわかった。

それにしても何故僕のことを聞くのか。これまたわけがわからない。

「もう戻っていますか」

執事が答える声がした。やはり僕のことについてだ。

「そう。森にいないと思ったら」

何か言葉に棘がある。いや、棘ではない。

言葉の中には何処か飢えがある。何かを欲しているような。

「まあ機会は幾らでもあるわ」

奥方はそう言った。

「食事の用意をして。今日はたっぷりとね」

「かしこまりました」

奥方はそう言うのと正門を後にした。そして自分の部屋に戻っていた。

「夜の間何処かに出掛けていたようだな」

僕はそう結論付けた。

「しかし何故だ」

それが不思議だ。

「夜に散歩するにしても一晩中だとは妙だ」

逢引、と邪推したが違う。大体主人公認の逢引というのもあるにはあるが毎日というわけにもいくまい。

結局わけがわからない。それに彼女は今えらくお腹を空かしているようだ。

「夜の間何をしていたんだ」

僕はそれについて考えた。そうしているうちに月が消え太陽が姿を現わしてきた。

「寝そびれたな」

白くなつていく空とその光を見せはじめた太陽を見て呟いた。仕方なくほんの少しまどろむことにした。

「それでも少しは寝ておきたいな」

そしてベッドに入り少し眠った。

一時間程しただろうか。部屋の扉をノックする音がした。

「はい」

僕はベッドから出て扉を開けた。

「お食事の時間です」

執事だった。僕は彼に導かれ食堂へ向かった。

「お早うございます」

見れば主人も奥方も僕を笑顔で迎えてくれる。こうして見ると先程の正門から聞こえた話が夢だったように思える。

「はい、お早うございます」

僕はそれに応えた。そして席に着いた。

「今日は何処へ行かれるおつもりですか？」

奥方は早速尋ねてきた。

「わかりませんね」

僕ははにかんだ顔を作つて答えた。

「あら、そうですの」

奥方は素っ気無く言った。だがその表情に微かに見えるものがあった。

それは舌打ちであった。整った美しい顔がその時一瞬だけ変わった。

醜くおぞましい顔であった。それはまるで血に餓えた獣のようであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕はそれを無言で見っていた。だが気付かれるのを怖れて主人の方

へ顔を向けた。

見れば主人は黙々と食事を探っている。その動きはやはり何処か無機質であった。

第十四章

食事を終え僕は城を出た。そして神父のいる教会に向かった。

「そうですか、夜明け頃にですか」

彼は僕の話聞き頷いた。

「確かに妙ですね」

彼の目が光った。

「それはかなり怪しいですね」

「やはり」

僕はその言葉に頷いた。

「はい。貴方が昨日森に行けなかったのを口惜しがっていたというのも気にかかります」

彼は言葉続けた。

「人狼は森を住処とするもの。そして夜にその真の力を出します」
それは知っていた。映画等で満月の夜に変身する姿をよく見たからだ。

しかし夜にだけ変身するかというところではないらしい。吸血鬼も昼にも出て来るし人狼も同様だという。だから一昨日あの森での事件があつたのだろう。

「私の予想が正しければおそらく彼女は……」

最後まで言わずともよくわかった。そうならば彼女がその整った姿の端に見せるあの怖ろしい顔が説明出来るからだ。

「貴方は昨日森に行けなくて正解でした」

「といますと」

僕は尋ねた。

「おそらく彼女は昨日森で貴方を待っていたのでしょうか」

「……」

僕はそれを聞いて沈黙してしまった。それが何を意味するのか嫌でもよくわかった。

「貴方は異邦人です。消えても誰も不思議には思いません」

「はい………」

それはよくわかった。おそらく日本から来た旅行者が行方不明になった、それで終わりだろう。運がよければ死体か骨が発見されるだろうが。

「古来からそうだったのです。吸血鬼や人狼に狙われるのは異邦人達でした」

「そうだったのですか」

吸血鬼と聞いて僕は心を凍らせた。人狼は吸血鬼と関係が深いと何かの本で読んだことがあるからだ。

「貴方はもう城に戻ってはいけませんね」

「はい」

僕はその言葉に頷いた。おそらく戻れば餌食にされるであろう。

「暫くここに留まったほうがよろしいかと。おそらく向こうも探していますよ」

「神父様さえよろしければ」

こうして僕は神父のいる教会に留まることになった。城の方には電話を入れておいた。

「そして今何処におられます？」

電話に出て来た執事が尋ねて来た。

「それは………」

僕は話しながら考えていた。おそらく追って来るつもりなのだろう。

「ミュンヘンの方へ向かっているところです。ヒッチハイクでもしよやかな、と思っています」

「そうですか」

彼は残念そうな声で電話を切った。

「………」

僕は側にいた神父の方に顔を向けて尋ねた。

「おそらく信じてはいないでしょうね」

彼は言った。

「すぐにでもこの辺りを探し回ることでしょう。使い魔等を使って」「使い魔ですか」

僕はふと黒猫や蝙蝠を思い出した。

「使い魔は何も黒猫や蝙蝠だけではありませんよ」

「おっと、そうでしたね」

僕はその言葉を聞いて思い出した。使い魔は鼠や梟、蛇等が使われることもある。一概には言えないのだ。

「気をつけたほうがよろしいですね」

彼はそう言うのと窓のカーテンを閉めた。

「彼等はその力が弱い為教会には入って来ませんが目と耳、そして鼻が利きます。それこそ網の目のようにね」

「網の目ですか」

「ええ。それが魔性の者達の目であり耳なのです」

かつて魔女達は自らの使い魔を使い情報を集めていたという。それは人狼にも言えることである。

「おそらくこの教会にもすぐに来るでしょう。気を緩めてはなりませんよ」

「はい」

それから数日僕は神父の教会に身を潜めた。

昼は部屋に閉じ籠もっていた。窓にはカーテンをかけじっと息を潜める。

そして夜になると眠る。こうして使い魔達をやり過ごしていた。

「しかしこうしてばかりもいられないでしょう」

夕食の席で僕は神父に対して言った。

第十五章

「はい。いずれ倒さなくてはなりませんから」

彼は落ち着いた声で言った。

「それなら何故今まで息を潜めていたのです？」

僕は問うた。

「こちらにも用意があります故」

彼は言った。

「用意！？」

「はい。人狼を倒す為の用意が」

その時彼が微笑んだように見えた。

「人狼は強力な力を持っています。その為普通のものでは倒せませ
ん」

彼はそう言うのと僕を礼拝堂に案内した。

「これを御覧下さい」

彼はそう言うのと一振りの大振りの剣を取り出した。

「それは……」

「これは銀で作られた剣です。法皇様より直々に授けられました」

「銀ですか。しかも法皇様から直接渡されたということは」

「そうです。これは破魔の剣です」

彼は鞘から刀身を抜いた。

剣は白銀の光を放っている。それは冷たい光で部屋を照らした。

「魔族は銀を嫌います。これに一月の間聖油による清めを行ないま
した」

「それで力をより強くしたのですね」

「その通りです」

彼は答えた。

「これによりこの剣の持つ力はより一層強まりました」

彼はそう言うのと別のものを取り出した。

「あとこれも用意しました」

それは短剣であった。見ればこれも銀で作られているようである。「これも法皇様より授けられたものです。剣と同じ様に聖油で清めました。これは貴方がお使い下さい」

「有り難うございます」

有り難かった。ひよっとすると銀の銃弾が込められた拳銃を渡されるかと思つたからだ。生憎僕は拳銃は使えない。

「そしてこれも」

今度は多量の塩と聖水であつた。

「これは言わずもがなでしょう」

「はい」

両方共魔物退治には欠かせないものだ。

「これだけあれば大抵の魔物は大丈夫なのですがね。ですが今回の相手はどうか」

「用心はしておいたほうがいいですね」

「そうですね。こちらも作戦を練りますか」

僕と神父は今後の戦い方について話し合つた。そして夜が明けた。翌日僕は暫く振りに外に出た。そしてあの城へ向かつた。

「おお、お久し振りですな」

執事は僕の顔を見て驚いた声をあげた。

「結局道に迷つてしまひましたね。ようやくこちらに戻つて来たのです」

僕はあえて情無い顔と声で言つた。

「そうですね。しかしご無事で何よりです」

やはり本心からは言っていないなかつた。何処か空虚な声だ。

「けれどももう部屋はないでしょう」

僕は残念そうに言つてみせた。

「いえいえ、ちゃんと空いておりますよ」

彼はすぐに答えた。

(やっぱりな)

僕はそれを聞いてそう思った。

「ほら、こちらに」

彼は僕を以前の部屋に案内した。

「これはどうも」

僕は再びその部屋に入った。

「それではごゆっくり。食事の時間になったらお呼びいたしますので」

「はい」

彼はそう言つと部屋を後にした。僕は部屋に入ると窓の方に行つて行つた。

窓の下を見る。そこには神父がいた。

「よし、丁度いい」

僕はそれを見て微笑んだ。彼は城に音も無く近付いて行く。

そして城壁を登つていく。どうやら手に鍵爪を着けているようだ。

「どうぞ」

僕は窓を開き彼を出迎えた。彼は素早く部屋に入つてきた。

「有り難うございます」

彼は部屋に入ると僕に対し礼を言った。

「いえいえ、それでは行きますか」

「はい」

僕は銀の短剣を受け取つた。そして二人で部屋を出た。

第十六章

「………恐ろしい妖気ですね」

神父は城の中を歩き回りながら言った。

「そんなに凄いですか」

僕は尋ねた。

「はい。ここまで凄いのは今まで数える程しかありません」

「数える程、ですか」

どうやらこの神父はかなりの修羅場をくぐって来たようだ。言葉がそれを物語っていた。

「人狼は女の方が力が強いと言いましたが間違いありませんね。これは女の人狼の気です」

「女の、ですか」

すぐに感づいた。あの奥方だ。

「もうすぐ夜にあります。奴等が来ますよ」

見れば目の前からメイドが一人やって来る。

「あ………」

彼女は僕と神父の姿を見て思わず声をあげた。

「ムッ」

神父は彼女の姿を認めてすぐに動いた。前へ突進し懐に持っている聖水をかけた。

「ギャッ」

それを浴びた彼女は思わず声をあげた。そして全身が溶けていく。

「これは………」

僕は溶けたその姿を見て思わず絶句した。それは生きた人のものではなかった。

「………クグツです」

神父はその溶けた屍骸を見下ろして言った。

「強力な魔力を持つ者が死せし者を操る術です。死せる者をね」

「ブドゥー教のゾンビみたいなものですか？」

「似ていますがね」

彼は答えた。

「しかしこれは少し違います。生きている者にそのまま術をかけ死者として自らのクグツとするものなのです」

「・・・・・・・・・・」

僕はそれを聞いて言葉を失った。生きている者をそのまま死者とし自分の操り人形にしてしまうとは。何と怖ろしい術なのであろうか。

「おそらくこの城にいる殆どの者がそれです。安心してはいけませんよ」

「・・・・・・・・・・はい」

僕はようやくこの城にいる人達のおかしさが理解できた。彼等は生きている者ではなかったのである。だからこそ動きも何処かぎこちなく生気が感じられなかったのだ。

廊下を歩いて行く。メイドがまたやって来た。

「あっ！」

そのメイドは思わず叫び声をあげた。神父は聖水をかけた。

全身が溶ける。だが遅かった。その声は城全体に響いてしまった。

「・・・・・・・・・・まずいですね」

僕は神父に対して言った。

「いえ、構いませんよ」

神父は言った。

「探す手間が省けるだけです」

その顔はあくまで強い表情だった。彼は窮地にいるとは思ってはいないようだった。

「・・・・・・・・・・そうですか」

僕はその表情を見て少し安心した。僕も動揺してはいけない。そう思った。

すぐに来た。前後から僕達を取り囲む様になって来た。

「いけませんな、騒がれては」

執事が前に出て来て言った。やはり生気の無い眼だった。

「奥様が帰って来られるまで静かにして頂かないと」

彼は音も無く前に出て来た。そして腕を突き出してきた。

「ムッ」

腕が僕の首にかかった。凄まじい力で締めてくる。

「糞っ」

このままでは殺られる、そう直感した。手にする短剣を振るった。

「グッ」

短剣が執事の腕を切った。すると瘴気を出して溶けた。彼は溶け

た手を押さえて怯む。

「どうやら銀に弱いというのは本当だな」

僕はそれを見て言った。

「だから言ったでしょう。魔物は銀に弱いと」

背中合わせに神父が言った。彼は背中に背負っていた銀の剣を抜いていた。

彼は剣を振るった。そしてクグツ達を次々に倒していく。

僕は執事を相手にしていた。彼はその力を頼んで僕に襲い掛かって来る。

「だがっ」

僕は短剣でその腕を切った。すると腕が落ちた。

腕を落とされた執事は怯んだ。僕はそこで前に出た。

「それっ」

僕は短剣を心臓に突き刺した。それを受けた執事は溶けていった。

「これで終わりか」

執事を倒した僕は廊下を見回しながら言った。

「はい。まだ残っていますか？」

神父は廊下に転がる屍を見下ろしながら僕に問うた。

「そうですね……」

元々この城には人はあまりいない。使用人は執事の他はメイドも

数人程しかいなかった。

「後はこの城の主人だけですな」

あの生気の無い主人だ。彼もおそらくクグツなのだろう。

「そうですか。そして彼は何処に？」

「それは……」

「私はここです」

不意に後ろから声がした。

第十七章

「！」
僕達はその声に総毛立った。咄嗟に声のした方から間合いを離し身構えた。

そこにはあの主人がいた。豪華な服を着て立っている。

「御安心下さい、私は貴方達とは戦うつもりはありません」

彼は静かな声で言った。

「というと？」

僕は探る声で尋ねた。

「私は貴方達にお話したいことがありこちらに来たのです」

「話したい事……」

それは一体何であろうか。僕も神父も考えた。

「ここでは何ですからこちらへ」

彼は僕達を城の奥に案内した。

そこは城主の間であった。窓から夕闇が見える。夕陽が今落ちようとしている。

「貴方達は私がクグツだと思っておられますね」

城主は部屋の中央まで来ると僕達に向き直り問うてきた。

「はい」

僕も神父も答えた。どう見てもそうとしか考えられなかった。

「それは事実です」

それを僕は当然のように受け取った。それ以外考えられなかったからだ。

「そして私の妻ですが……」

彼はさらに語った。

「人狼です。それも強大な力を持つ」

「……」

驚ろかなかった。今更、という気もした。

「そしてその貴方が僕達に一体何をお話されるというのですか？」
僕は少し高圧的な声で尋ねた。やはり相手が人でないと警戒を解けない。

神父もだ。手から剣を離さない。

「私はこの家の跡継ぎとして生まれました」

彼は静かに語りだした。

「そして跡を継ぎ妻を娶りました」

「それがあの奥方だったと」

「はい。彼女はあの森ではじめて会いました」

僕の問いに対し彼は答えた。

「初めて会った彼女はとても美しい女性でした。私はその美しさに心を奪われたのです」

彼は話を続けた。

「私は彼女に結婚を申し込みました。そして彼女はそれを受け入れてくれたのです」

「そしてその後で彼女の正体に気が付いた、と」

「いえ、既に知っていました」

僕達は彼の言葉に驚いた。

「初めて見た時には既に人ではありませんでしたから」

彼女は正体を表わしていたのだ。

「美しい姿でした。私は一目でその姿に魅了されてしまったのです」

それは彼女の持つ魔力であつたのだろうか。

「私は神の道に反してしまったのでしよう。しかしそれでも湧き起こる想いを抑えることは出来ませんでした」

彼の目は半ば恍惚としていた。

「私は彼女を城に連れて行きました。そして妻としたのです」

人狼に心まで支配されてしまっていたのだ。

「人の姿をとった彼女の姿も美しいものでした。私達は幸せに暮らしました」

彼は自分の幸福を語っていた。それは別段不思議に感じなかった。人の幸福というものはその人にしかわからないものなのだから。

「しかし」

彼は顔を曇らせた。

「彼女はやはり異形の者でした」

彼はその声を暗いものにした。

「彼女は私を愛してくれてもその心はやはり魔性であったのです」

「やはり……」

神父はそれを聞いて呟いた。

「彼の者達の心は我々とは違います。それ故に魔物なのですから」
僕はその言葉に心の中で頷いた。人間とはその心で人間であるのだ。姿形はどうあれその心が魔界にある者は魔物であると思う。

そう考えるようになったのは皮肉にも人の歴史を学んでからであった。フランスで美少年を殺戮した狂気の同性愛者青髭ジル「ド」レイ。鉄の処女というおぞましい機械で少女の血を絞り取りその血の風呂に身体を浸し永遠の美を望んだ血塗れの伯爵夫人エリザベート「バートリー」。罪無き者を魔女に仕立て上げその全てを奪ったうえで惨たらしく殺していった悪辣な異端審問官達。彼等の心は人のものではなかった。魔物のものであった。

第十八章

僕は考える。その人の心がそのまま外見を現わしたならばどうなるのだろうか、と。だがそれはある程度はわかる。人の生き方は顔に出る。

「彼女は人を襲いました。そしてその肉を喰らったのです」

「あの森の事件もそうですね」

僕はそれを聞いて言った。

「はい。その通りです」

主人は哀しそうに言った。おそらく彼は本来は優しい心の持ち主だったのだろう。

「しかし私にはそれは止められませんでした」

彼は瞑目して言った。

「それは何故ですか？」

神父が尋ねた。

「私ももう人ではなくなっていたからです」

彼は哀しい声で言った。

「彼女を妻とした時に私は生者ではなくなりました」

彼もまたクグツであったのだ。

「執事も使用人達も。この城にいる者は全て彼女の僕、いや人形となつてしまったのです」

それが魔界の者の心なのであるうか。愛してくれている者をもクグツとするということが。

「しかし私はそれでもよかった」

彼は言った。

「彼女と共にいられるのだから」

彼は悲しい声のまま言った。

「私の彼女への愛は変わらなかった。例え彼女が何者であろうと」
そう、彼は奥方の魔力に心を奪われたのではなかったのだ。

彼の言葉通り彼女に心を奪われたのだ。それは最早何者にも如何ともし難いものである。

「私は自分が彼女を愛しているだけで充分だった。それが私にとって全てなのだから」

彼は一言一言噛み締めるように言った。

「しかし彼女は違っていた」

彼は哀しい目をした。

「彼女はやはり魔物だった。人を貪り食いクグツとする魔物だった。彼の心はそれに耐えられなかったのだらう。」

「私は彼女のそんな恐ろしい姿を見たくはなかった。だが彼女はそれを止めなかった」

当然である。それが魔物の生きる術なのだから。

「そして私は長い間それに耐えてきた。しかしもうそれも限界だった」

「そしてその時に僕達が来た」

僕は言った。

「はい。私は今日という日が来るのをどれだけ待っていたことか。彼は微笑んで言った。

「彼女にこれ以上の恐ろしい行いを止めさせるその時が来るのを。それがようやく来たのです」

「しかし」

神父が尋ねた。

「それが何を意味するか貴方はご存知の筈ですが」

「はい」

「彼はその言葉に微笑んだまま頷いた。」

「それは覚悟のうえです」

「主が死ねばクグツも滅ぶ。それは定めだった。私は既に生者ではありません。今更これ以上この世にあっても意味はありません」

彼は静かに言った。

「私の望みはただ彼女がこれ以上罪を重ねないこと。といっても魔性の者である彼女には理解出来ないでしょうが」

彼はそう言うと静かに僕の前に来た。

「これをお借りしますね」

彼はそう言うと僕の短剣を手に取った。

第十九章

「それは……」

僕は止めようとした。だが彼はそれに構わず短剣を掴んだ。

魔性の息吹を受けた者にとって銀は猛毒である。それを持つ彼の手は瞬く間に溶けていく。

「いいのです」

彼はその手が溶け消えてなくなるより前に動かした。そして自らの首を掻き切った。

「な……」

それを見て僕も神父も唾然とした。まさか自決するとは。

「私は彼女の美しい姿を心に留めたまま去ります」

彼は短剣を僕に返して言った。

「そして彼女を待つことにします」

そう言うのと倒れた。

「お願いしますよ。彼女を。そしてこの地の禍を取り除いて下さい」彼の身体が溶けていく。

「私はそれが出来ませんでした。本来なら真つ先にそれをしなければならぬ筈なのに」

貴族の務めはその土地と領民を護ること。それこそが高貴なる者の務めとされてきた。まあ中にはそれをせず特権に胡坐をかき愚行の限りを尽くした者もいるが。

「わかりました」

神父はそれに答えた。

「安心して旅立って下さい」

優しい声であった。まるで死に行く者の不安を取り除くように。

「有り難うございます」

主人はその言葉に対し安堵したかのような声で答えた。

「その言葉を聞いて安心しました」

そう言うと完全に消えた。

「さようなら」

それが最後の言葉だった。彼はその姿を完全に消した。

「行かれましたね」

僕はそれを見て神父に対して言った。

「はい。あの方は最後まで人でした」

彼は瞑目するような顔で言った。

「その心は最後まで人のものでした。ですから」

彼は言葉を続けた。

「その願いを叶えなければなりません」

「はい」

僕はその言葉に頷いた。

「行きましよう。おそらくもうすぐこの城に戻って来る筈です」

見れば夜になっている。本来ならば明け方にならないと帰って来ないが今は状況が違う。自身のクグツが消えたことは彼女も察知しているだろう。おそらく今頃恐るべき速さでこの城に戻ってきている筈だ。

「わかりました」

僕は頷いた。そして踵を返した。

「ご主人の心を無駄にしない為に」

僕達は部屋を出た。そして城の中で息を潜め彼女が帰って来るのを待った。

正門が破壊される音がした。凄まじい衝撃が城内に伝わる。

そして恐ろしい冷気が城内を支配した。間違い無い、戻って来た。僕達は食堂にいた。そしてそこで彼女を待ち構えていた。

「準備はいいですか？」

神父は僕に囁きかけてきた。

「はい」

僕は答えた。気配が一步一步こちらに近付いてきているのがわかる。

「来ますよ」

神父が言った。

「はい……」

僕は頷いた。今扉が開こうとしている。

奥方が入って来た。金色の髪は月の光を照らし美しく輝いている。白いドレスが夜の闇の中に映し出される。

「ようこそ帰られました」

彼女は僕に対し微笑んで言った。

「我が牙の餌食となり」

そう言つとニイイ、と笑つた。白い牙が見えた。

「もう一人尾お客様もいらしてますし」

神父の方を振り向いて言った。

「お二人も来られるなんて。今夜は楽しくなりそうですね」

その全身から恐ろしい気が立ち昇つた。ドス黒くそれでいて悪寒が全身を走る程邪悪な気だった。

「思う存分もてなさせて頂きますわ」

彼女が口を開いて笑つた。その齒は既に狼の牙となり白く光っている。

第二十章

「……………ご主人の言葉をお伝えしましょう」

神父は彼女に対し静かに言った。

「……………」

彼女はそれを聞くと表情を消した。そして神父に顔を向けた。

「貴女を退治して欲しいと。そして先に待っている」と

「……………」

彼女は一瞬悲しそうな顔をした。だがそれをすぐに消した。

「けれどそれは適いませんね」

彼女は再び顔に笑みを作って言った。

「何故ですか!？」

僕は問うた。

「貴方達が代わりに行くからですわ」

そう言うとその青い眼を光らせた。

「私は誇り高き人狼の者。人間などに倒される筈がありません」

その顔を金色の毛が覆いはじめた。

「そしてこの永遠の命を楽しむ。血と肉を楽しみながら」

毛が腕も覆う。手が狼のものに変わっていく。

身体が人のものから狼のものになっていく。そして服から出て完

全に人ではなくなった。

そこにいたのは黄金の毛を持つ巨大な狼であった。月の光に照ら

されたその姿は気高いまでに美しかった。

だがそれは外見だけであった。全身は黒い瘴気に覆われ青い眼は

血に餓えて燃え盛っていた。

「フフフフフフ」

彼女は笑った。狼の笑いではなかった。何と人の声だった。

「さあ楽しみましょう」

左右の燭台が宙に浮かび上がった。

そしてそれは僕達に向かって飛んできた。僕達はそれを剣と短剣で叩き落とした。

「長い夜の宴を」

それが始まりの言葉だった。彼女は跳躍して僕達に襲い掛かって来た。

彼女はその牙と爪で襲い掛かる。僕達はそれに対し銀の武器と持つて来た聖水等で対抗する。

「喰らえっ！」

僕は聖水を浴びせかけた。そして次に塩を浴びせる。

だが彼女は一向に動じない。それに構わず襲い掛かって来た。

「クッ！」

僕はその牙を側にあつた椅子を投げてかわした。椅子は彼女の身体に当たり粉々に砕け散った。恐ろしい身体である。

「それならっ！」

神父が懐からあの拳銃を取り出した。そして発砲する。

しかしそれは命中しなかった。彼女は素早く跳躍しシャンデリラの上上がった。

「フッフ、惜しかったですね」

彼女は自信に満ちた声で言った。

「折角に銀の弾丸も当たらなければ意味のないこと」

彼女は笑って言った。

「聖水も塩も通用しないとかな」

僕は彼女を見上げて忌々しげに呟いた。

「先程のお水ですか」

彼女はそれを聞いて嘲笑する声を出した。

「あの程度でこの私を倒せると考えておられるとは」

その声を聞いて僕は一瞬絶望しそうになった。

「クグツならいざ知らず」

彼女は僕達を見下ろしながら言った。

「この私には通用しませんわね」

そうであつた。高位の魔族には聖水や塩程度では効き目がないのだ。

「私を倒そうと思つたら銀でもない」と

その銀を僕達は持つている。しかし。

「けれど私に傷を付けられなくては全く意味がありませんわね」

その通りだつた。狼の戦闘能力は人と比べて圧倒的に高い。普通の犬でも人はまともに太刀打ち出来ないのだ。それが狼となると。ましてや彼女は狼ですらない。魔界より来た魔性の人狼なのだ。

「ウフフフフフフ」

彼女はシャングリラから跳び降りてきた。

「まだ夜も長いですし」

彼女はそう言つて後ろに跳んだ。

「まだまだ楽しませてもらわないと」

眼が光つた。すると彼女の身体が左右にぶれ動いた。

「なっ……」

何と彼女が五人に増えた。そして僕達を取り囲んだ。

「これは一体……」

僕はそれを見て思わず呟いた。

「幻術です」

神父はその中の一体を見ながら言つた。

「ご安心下さい。彼女が増えたわけではありません」

彼はそう言いながら剣を構えた。

「このうち四体は幻に過ぎません」

それを聞いていささか安心した。

「しかし本物がどれか見極めないと」

「待っているのは死、ですね」

僕は答えた。

「……はい」

神父はそれに答えた。五体の金狼が同時に襲いかかってきた。

第二十一章

「ウオツ！」

僕には二体来た。まず一体を屈んでかわす。だがそこにもう一体来た。

「まずいつ！」

僕は横に転がってそれをかわした。だが遅かった。その牙が襲い掛かる。

「こうなったら！」

僕は右手で護った。狼の牙がそこに来る。

しかしそれは幻影だった。牙は僕をすり抜け向こうに行った。

「助かったか……」

だが神父はそうではなかった。剣を持つ左腕を傷付けられていた。

「グウウ……」

床に血が零れ落ちる。神父は傷口を右手で押さえている。

かろうじて剣はまだ持っている。しかしその傷では満足に振れないことは明らかであった。

「これで剣は使えなくなつた」

一体に戻つた彼女はそれを見て満足気に笑つた。

「あとはゆっくりと時間をかけていくだけ」

そう言つと間合いを取つた。

「さあ、覚悟はよろしいですか？」

そう言つと僕に向かってきた。

「ウワツ！」

牙が右手を襲つた。右の甲が切られた。

「かすただけでか……」

傷口からは骨が見えている。牙も狼のものより遙かに鋭い。

彼女は間髪入れず再び来た。今度は右肩をやられた。

速い。まるで鎌イ足だ。到底かわせるものではない。

「如何でして？私の牙は」

彼女は着地して言った。

「見事なお味でしょう」

まるで猫が鼠をいたぶるのを楽しんでいるような、そんな声だった。

本来狼はそのような習性は無いのだがやはり魔性の者だけあり習性が異なっているようだ。彼女は明らかに僕達を嬲りものにして楽しんでいる。

「ええ。確かに」

僕は強がって言った。皮肉を込めようにも出来なかった。

「それは何より」

彼女はそれを言葉通り受け取った。圧倒的な力を持っている為の余裕である。

「しかしまだまだ終わりではありませんわよ」

そう言っただけで再び間合いを開いた。

この時僕はその動きを見て気付いた。

速い。そしてしなやかだ。だがそれだけではない。

動きは狼の動きそのままである。そう、狼の。

(当然と言えば当然か)

僕はそれを見ながら思った。この時あることに気付いた。

(狼と同じという・・・!!)

狼もまた無敵ではない。僕はそれを思い出した。

大学で犬の生態について教えてもらった。犬の最大の武器は牙だと。

しかし逆にそれが犬の最大の弱点だと。

牙を使うには絶対に噛まなくてはならない。その時に隙が出来る。今日の前に牙が迫る。鋭い牙だ。

その牙に触れてはならない。しかしその中には何も無いのだ。

「そこだっ！」

僕は叫んだ。そして奥方の口の中に右手を突っ込んだ。

その瞬間奥方の目が笑った。一気に噛み切り飲み込むつもりだったのだろう。

しかしそれは出来なかった。口は開いたまま閉じることが出来なかった。

僕はその舌を掴んでいたのだ。これならば力が入らない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女はそれから必死に逃れようとする。だが出来ない。舌を完全に掴まれているからだ。

僕は左に持つナイフで彼女の喉を掻き切った。喉から鮮血が噴き出る。

「な・・・・・・・・」

神父はそれを呆然と見ていた。僕はその彼に対して叫んだ。

「神父さん、今です！」

彼はその言葉に我に返った。そして剣を再び構えた。

そしてその剣を彼女の腹に突き立てた。赤い鮮血が飛び散った。

第二十二章

「決まったな」

致命傷だった。僕はそれを確認すると喉から手を引き抜いた。彼女はそのまま床に落ちた。そして自身の鮮血の中に沈んだ。

「グググ、まさか私の舌を掴むなんて……」

彼女は呻きながら言った。そして次第に人の姿をとっていく。

「話さないほうがいいですよ。傷に触ります」

僕は言った。最早あと幾許かも生きてはいられないであろう。せめて安らかに死ぬべきだと思った。

「フフフ、お優しいですね」

彼女は人の姿に戻って言った。

「けれど心配はご無用ですわよ」

彼女は魔法で白い服を出しそれで身を包んだ。他の者にその肌を見せまいとする彼女の誇りが為せることか。

「自分のことは自分が一番わかっております故」

そう言つと静かに立ち上がった。喉と脇腹からは血が噴き出している。

「それにしてもよくあんなことを思いつきましたね」

「狼の身体に気付いたんです」

僕は彼女を見据えて言った。

「狼の!？」

彼女はその言葉に対し問うた。

「はい」

僕は答えた。

「狼は相手に襲い掛かる時口が開きます。それはすなわち口の中に隙が生じるということです」

「そうでしたの……」

どうやらこれは彼女自身も気付いていなかったことのようなのだ。

「その口の中にある舌を掴んで引つ張れば動けなくなります。そうすれば後は窒息させるなり今のように喉を切るなり思いのままです」
「誇り高き我が人狼のそんな弱点があるとは……………迂闊でしたわ」

「いえ、それは迂闊ではありませんよ、奥方」

僕はそれに対し言った。

「どのような者にも必ず弱点があるのです。吸血鬼にもあるようにね」

人狼と吸血鬼は近い関係にあるという。僕はそれを出して言った。
「彼等が日を嫌うのとは事情が異なりますが。それでも今度ばかりは死ぬかと思いましたがよ」

僕はそう言つて苦笑した。

「犬の遊びの相手はしたことがあります。貴女のような方ははじめてです。正直死ぬかと思いましたが」

「それは残念でしたわね」

彼女は微笑んで言った。

「まあ。けれどももうお相手するのはこれが最後でありたいですね」

「それはご安心を。私はもうすぐこの世を去りますわ」

「そうですか。ご主人がお待ちですよ」

「あの人……………」

彼女はそれを聞くと顔を急に優しいものにした。

「あの人がいるのからいいわ。何処へ行っても寂しくはない」

「……………」

それを見て僕も神父も不思議な気持ちになった。彼女もまた夫を愛していたのだ。

人と魔族、しかもググツとしていたというのに。それでも彼女は彼を愛していたというのか。

「初めて見た時から忘れられなかった。あの人とずっと一緒にいることこそ私の望み」

どうやら彼女は森で彼を見てそれ以来心を奪われていたようだ。

そして人の世に入ったというのか。

しかし彼女はやはり魔性の者であった。それにより夫をはじめとして多くの者を自らのクグツにし罪無き人達をその餌食としてきた。それは彼女が魔物だからであろうか。やはり人を愛していても魔族の心は消えなかったのか。

「もうすぐね。あの人の側に戻れるのは」

そう言うとニコリと微笑んだ。

「それならもうここにこれ以上いても意味はないわね」

彼女はそう言うとその手に赤い炎を宿らせた。そしてそれを床に投げ付けた。

「お逃げなさい。この城はもうすぐ燃えてなくなるわ」

僕達の方を振り向いて言った。優しく気品のある笑みだった。

「私はこうしてあの人の元へ行くわ。あの人と共にいたこの城と共に」

炎は次第に燃え広がっていく。僕達の足下にも近付いてきた。

第二十三章

「行きましょう」

神父は僕に対して言った。

「は、はい」

僕はそれに対して頷いた。

「さようなら」

彼女は部屋を出ようとする僕達に対して言った。それが最後だった。

扉を閉める瞬間に炎が部屋を覆った。僕が最後に見たのは炎の中に消える黄金色の美しい狼であった。

僕達は城を駆けて行った。途中荷物を取り門を出た。

城を出て暫くして城は紅蓮の炎に包まれた。石の城が今紅い炎の宮殿となった。

「………終わりましたね」

神父はそれを見上げて言った。

「………はい。思えばあつという間でしたね」

僕は彼と同じように炎に包まれた城を見上げて言った。

「それにしても貴方には助けてもらいましたね」

彼は静かに微笑んで言った。

「貴方がいなければおそらく私は生きてはいなかったでしょう」

「いえいえ、そんなことは」

僕はその言葉に思わず謙遜した。まさか法皇直属の退魔師にそのようなことを言われるとは。

「いえ、その通りです」

彼は強い声で言った。

「これが神の思召しだったのでしよう。貴方のその知識を魔物を退けるのに使うようにと」

「そうなのでしょうか」

「はい。ですから貴方はここに来られたのです」

「……………そうですね」

正直人の運命というものはわからない。そもそもドイツに一人旅に来たからこうなったのだが。

それが運命か。それでもまさか人狼と戦うことになるうとは。これではまるで漫画である。

「これからどうされます?」

彼は僕に尋ねてきた。

「そうですね」

幾ら何でもここまで凄い体験をしたらまだ旅を続けようとは思えなくなる。

「傷が癒えたら日本に帰りますか。そしてゆっくりしたいですね」

もう魔物と戦うのは御免だった。

「おや、それは奇遇ですね」

彼はそう言うとニコリと微笑んだ。僕はそれを見て何か嫌な予感がした。

「私の次の仕事は日本の予定です」

「え!?!」

僕はそれを聞いて思わず声をあげた。

「神戸という街に人々を騒がす悪霊が出るという話ですので。法皇様から伝えられているのです」

「何と……………」

ローマ法皇というのはやはり相当忙しいようだ。まさか遠い極東の一都市にまで目を向けなければいけないのだから。

この時僕は黙っていた。一つこの神父に黙っておかなければならないことがあるからだ。

「おや、どうされました?急に静かになられて」

「……………いえ」

僕はとりあえず誤魔化した。絶対に言ってはならない。

僕はその神戸に住んでいる。もしそれを言ったら今度は幽霊退治

に駆り出される。

「傷が癒えたら日本へ行くとしましょう。そして悪霊を調伏せねば」
「……はあ」

黙っていよう。

「もしまたお会いした時は宜しくお願ひしますね」
願わくばそんな時は絶対に来ないで欲しい。

「しかしそれは全て神の御意志の下ですが」

僕は残念なことに自分の運命については全く知らない。しかしそんな運命は絶対に嫌である。

「ですがもし神が望まれるならば私達はまた会うことになるでしょう」

「そうですね」

「はい。それこそが神の御力です」

僕はそれをもう殆ど聞いていなかった。そんな運命は絶対に来ないで欲しいと神に祈っていたのだ。

しかしその祈りは聞き届けられなかった。日本に帰って暫くしてよりによって学校に行く途中で会ったのだ。

「神よ、この思し召しに感謝致します」

彼は微笑んで言った。だが僕はその運命を天を仰いで嘆くばかりであった。人の運命とは本当に神の意のままである。

古城の狼 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3197f/>

古城の狼

2010年10月8日13時46分発行